

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

シンポジウム 『『危機』にふれる：レバノンとケニアのフィールドをめぐるふたつの著作から』

日時：

開催日：1月13日（日） 14:30～18:00

場所：

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306 室

プログラム：

1. 西井涼子（AA 研究所員）挨拶
2. 池田昭光（AA 研研究機関研究員）自著紹介 1
「自著紹介——書かれなかった後書き」
3. 安川一（一橋大学）：コメント 1
4. 吉田優貴（AA 研研究機関研究員）自著紹介 2
「making of 『躍っている』」
5. 野澤豊一（富山大学）：コメント 2
6. 全体討論

参加者：20 名

内容：

池田は自著『流れをよそおう——レバノンにおける相互行為の人類学』について、研究の経緯を述べつつ、特に（1）当初予定していたイスラーム教育に関する調査の挫折、（2）研究の方向性を変更する模索の中でつかんだ「人類学を『逆』にする」という発想について掘り下げ、同書のコンテクストを浮かび上がらせる試みを行い、また、これらの過程が人類学的研究一般に対して示唆する点について指摘を行った。

コメンテータである安川一氏（一橋大学）は同書および池田の報告に対し、（1）書籍中で示された「流れ」という用語に揺れがあること、（2）「流れ」の語を通じて記述されたのは、文化的な解釈にも個々人の戦略にも回収されない「行為の宙づり」のような営みであること、（3）「動き」を前景化させる試みはさらに探究の余地があること、を中心に指摘を行った。また、同氏は全体討論において、同書は吉田氏の著作とも共通し、現地社会の分節化の基準を外部ではなく、当該社会内部に置く点が特徴的であると述べ、議論の射程を拡張させた。

（文責 池田）

本発表は、自著『いつも躍っている子供たち：豊・身体・ケニア』（2018 年、風響社）の紹介として、「making of 『躍っている』」というタイトルで自著製作の舞台裏を発表した。第一に、自著の構成について紹介をおこない、ネットワーク的な構成自体が議論そのものであるとした。第二に、自著の内容について紹介をおこない、複数人が居合わせた場での出来事を、「個体」や「主体」といった前提を脱し「身体群の共振」として捉えようとしたことを示唆した。

本書について、富山大学の野澤豊一氏より、音楽や身体、芸能、宗教をテーマにした文化人類学的研究の観点からコメントをいただいた。誰か／何かに合わせる「踊り」と好き勝手な「躍り」というように本書で表現／分析した事象について、ある事象がいずれかにカテゴライズされるといっても、「踊り」と「躍り」の連続性についても考える必要があるとの指摘を受け、今後の課題とした。

（文責 吉田）

当報告の内容は著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.